ウェブサイト公開用

令和４年度　第２回富士市総合教育会議　　会　議　録

開催日	会議場
令和４年１２月２０日　火曜日 開　会　　１５時００分 閉　会　　１６時３３分	富士市庁舎６階　第一・二会議室

出席者の氏名

市　　長	小長井　義　正	教育委員	篠　原　　均
教　育　長	森　田　嘉　幸	教育委員	松　田　靖　子
教育長職務代理者	和久田　惠　子	教育委員	塩　谷　知　一

出席職員（事務局）の氏名

教育次長	江　村　輝　彦	博物館長	植　松　良　夫
教育総務課長	味　岡　俊　雄	市民部文化スポーツ課長	杉　山　幸　宏
学校教育課長	齋　藤　文　徳	学校教育課教育指導室指導主事	吉　田　博　紀
学務課長	榎　　俊　英	教育総務課参事補	吉　村　直　也
社会教育課長	吉　田　和　洋		
文化財課長	久保田　伸　彦	教育総務課調整主幹	小長谷　　聡
中央図書館長	大　川　英　子	教育総務課主幹	遠　藤　綱　輝
富士市立高校事務長	青　木　　洋	教育総務課指導主事	米　田　一　也
教育研修・特別支援教育センター所長	川　崎　里　恵	教育総務課指導主事	山　田　英　雄
青少年相談センター所長	川　口　壽　彦		

傍聴人３名

議題（動議）及び議事の大要

（議　案）

議第２号　部活動の地域移行と富士市の方向性

ウェブサイト公開用

開会
事務局
（開会）

市長あいさつ
市長
こんにちは。
教育委員の皆様には、お忙しい中御出席をいただきまして、誠にありがとうございます。
今回の総合教育会議の議題は、部活動の地域移行と富士市の方向性とさせていただきました。これまで中学校の部活動は、生徒のスポーツや文化に親しむ機会を確保し、活動を通じてすがすがしい達成感を得ることや、人間関係の築き方を学ぶこと、ひいては学習意欲の向上にも繋がるものとして、大きな役割を担っていました。しかしながら現在は、生徒数の減少により部活動の種類が減っており、これにより生徒が希望する部活動を選べないことや、働き方改革を進める中で部活動の指導が教員にとって大きな負担となっているなど、様々な課題が生じております。これらのことを受け、国や県では、部活動の地域移行への考え方を示しております。本日は国・県の考え方を念頭に置きながら、本市の部活動の現状と課題を踏まえ、今後の部活動について大切にすべきことは何か、また少子化の中でも、将来に渡り子供たちがスポーツや文化に親しむ機会をいかに確保していくのかについて、委員の皆様と意見交換をしていきたいと考えています。
どうぞ、よろしくお願いいたします。

事務局
ありがとうございました。
本日のテーマは、先ほど市長の方からございましたように、部活動の地域移行と富士市の方向性についてであります。
それではこれから議事に移りたいと思います。議事の進行につきましては、この会議の主宰者であります市長にお願いします。
市長、よろしくお願いします。

議事
議第２号「部活動の地域移行と富士市の方向性」
市長
それではここから私が進行役を務めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。
早速議事に移りたいと思います。次第を御覧ください。議第２号、部活動の地域移行と富士市の方向性についてでありますが、今回は部活動の現状と課題、それから国や県から地域移行のガイドラインが出ていますので、それらを踏まえて、富士市の部

活動の方向性について、教育委員の皆様と意見交換をしたいと考えています。
　まず、意見交換の前に、事務局から資料の説明をお願いいたします。

事務局
　（「部活動の地域移行と富士市の方向性」について、資料に基づき説明する。）

事務局
　（会議論点の整理をする。）

市長
　事務局からの説明を終わります。
　今説明がありましたように、議論の進め方は、（１）、（２）についてまず、現状と課題について確認をするところから始めて、のちに（３）の部活動の地域移行について、後半の方で皆さんからの意見を頂きたいと思います。
　それではまず、Ａ３の資料１「これまでの部活動」と、２「社会の変化とともに、課題が顕著になる部活動制度」、この２つの項目について、皆様方から御意見、御質問を頂きたいと思います。
　私から質問をしてよろしいでしょうか。
　１のところで確認ですが、現在の部活動の状況ということで、矢印で書いてありますが、この時間ですが、冬季は 15 分とか 30 分しかできないということですか。これだと、ほとんどできないですね。これは暗くなるのが早いから、早く子供を帰すということでしょうか。

事務局
　冬季の時間については、日没の時刻と大きく関係しています。子供たちが部活動を終えて家に着くまでに日没になってしまいますので、そのことを考えると、４時半には学校を出ないと日没までに家に着かないです。子供によっては距離があって、30 分以上掛かる子供もいます。そのことを考えると、どうしてもこの時刻になってしまいます。教育活動が終わって部活動を始められる時間が、６時間授業の日ですと、４時ぐらいからのスタートとなりますので、準備をして、活動をして、片付けをしてということを考えますと、どうしても活動時間はこれぐらいになってしまいます。

市長
　あと、部活動指導員が９人ということで、期待をされていたところではありますが、９人というのはどうですが。少し少ないかなという思いもしますが、何か課題はありますか。

事務局
　やはりこれは平日になるものですから、部活動指導をする時間に学校に来るというと、仕事をされている方だと、なかなか難しいというところが大きな問題になりますし、部活動指導員の勤務時間を考えますと、なかなか人を集めることは難しいかなと

思います。

市長
　土日限定でお願いするということはありませんか。

事務局
　それもあります。そういう方もいらっしゃいます。

市長
　そういう方もいるけれども、それでも９人しかいないということですか。

事務局
　これは部活動指導員といって、お金を払ってやっていただいている方は９人なのですが、これとは別に外部指導者ということで、報酬は発生しませんが、部活動を見ていただいている方は、その他何十人かいらっしゃいます。

市長
　何人ですか。

事務局
　40 人です。

市長
　その方々は大体土日ですか。

事務局
　そうです。大体土日です。

市長
　委員の皆さん、何かございますか。

教育委員
　平成 30 年からある程度部活動時間を減らしてきていますし、自分の子供の様子を見ていても、かなり少ないなと思っていました。実際に削減をしたことで、教員の負担感というものは減っているのでしょうか。

事務局
　やはり土日どちらかの１日になったことで、考え方によっては週に１日は確実に休める日ができたので、そういう意味では負担感はかなり減ったと思います。同じ静岡県内でも、地域によってはそこが徹底できずに、土日にフルでやっているところがある中で、富士市はそれを徹底しているので、富士市についてはかなり負担感は減った

と思います。

教育委員
　もう１点よろしいですか。
　子供にとっての満足感というのは、冬季に 15 分から 30 分というと、ほとんどできないと思いますが、そういうところでの満足感はあるのでしょうか。

事務局
　満足感は、もちろん子供によって全然違います。富士市は全員加入をとっているので、必ずどこかの部活に入らなければならないので、運動が苦手であわよくば練習をしたくないというタイプの子供もいます。上手になって高校や、さらにその上までやりたいという子供もいます。そういう子にしてみれば、土日両方ともやっていたい、物足りないということです。そのため、子供によってということになります。

事務局
　本年度６月に行ったアンケートの中に、学校の部活に感じている問題点を２つ選んでくださいという項目がありますが、そこでは一番大きな問題点として、肉体的な疲労が挙がっています。続いて時間、日数が長いと回答している生徒が続いて多いです。その次が、専門指導が受けられないとなっています。この３つが大きな問題だということが出ています。その他のところに、活動時間や日数が短いと回答している生徒も確かにおりますので、やはり今、事務局が申した通り、様々にはなっているなという認識です。

教育委員
　部活動だけの問題ではなくて、今人数が減っているので、生徒会にも入っていて、生徒会の方に時間が取られていることもあります。個人的なことですが、子供が野球部に入っていて、今週は野球の練習が２回ぐらいしか無いと言っていた時がありました。何をしていたんだと聞いたら、生徒会があったり、あれがあったり、これがあったりで、なかなか部活に出られなかったということがありました。部活だけの問題ではなくて、他のことの問題と併せて考えないと、部活だけを捉えてもあれかなということも考えました。

市長
　特に生徒会の活動について何かありますか。

事務局
　生徒会活動の回数については、各学校によって活動がかなり違っているので、それを部活に出る時間を確保するために極力時間を抑えてという学校もあれば、やはり充実した生徒会活動をやりたいということで、特に生徒会の本部役員については、かなりそちらの活動に時間を取られてしまうということは、現状としてあります。そのために、生徒会の本部役員になりたがらない、非常に力があるけれども、部活動を優先

するのでやりたがらないという課題もあります。

市長
　全員部活動に入るということで、生徒会活動をやるので部活動には入らないということはないのですか。

事務局
　ないです。

市長
　基本的には、どこかの部活動には入るということですか。
　部活動の活動と、生徒会の活動の評価というのは、また別ですか。生徒会の活動を一生懸命やったお子さんも、当然評価しなければならないですよね。

事務局
　同じように、これは評価というのは進路に関わることになりますが、当然、生徒会活動の方で顕著な実績を残している生徒については、そのこともその生徒の活躍としてしっかりと評価していきます。

教育委員
　先生方の働き方ということについては、どちらかというと負担が大きすぎて、先生方の負担を減らすべきだという議論はよく分かります。一方で、先生方の統計というか考え方で、本当はもっと部活指導をやりたいのに、十分にやれないという意見を持った先生方がどれほどいるのかや、例えば時間の問題もさることながら、先生方もボランティアでやられているものですから、適切な予算等が講じられれば、もっと子供たちへの指導に力を入れるといった先生方がどれぐらいいるのかといったことなどの、もっとやりたいという意見は一定程度あるものなのでしょうか。それともやはり、どちらかというと負担が大きくて、部活動指導が大変だから小中両方免許はあるけれども小学校を選びたいというような、そういう負担感の方が強いのでしょうか。実情、実態はどうなっているのか、分かれば教えてください。

事務局
　県のデータになりますが、部活動指導に割く時間が多くて、授業研究だとか、自分の研修だとかといった、通常業務ができないと言っている人は、およそ 60%いらっしゃいます。また、部活動の指導について、プライベートな時間が取れないと言っている人は、８割です。さらに、自分の家族の理解が得られないという方は、半数います。それから、兼職兼業を含めて、そういった制度を利用して、休日に指導者を引き受けたいと思うかという質問に対しては、兼職兼業を望まないという方が、約 70%いました。

市長
　そうすると、委員が質問されたような、積極的にやっていきたいという声は、比較的少ないということですね。

事務局
　先ほどの生徒と同じように、やりたいという方と、やりたくないという方が、かなり両極端になってきているのかなという印象です。

教育委員
　この意見交換のシートに乗っていきますと、これまでの部活動というのは、私が自分の時の部活動と、子供たちの時の部活動、これまた大きな差がありますので、どこを「これまでの」と言っていいのか分からないですが、当時は放課後を目一杯使って、土日祝日も部活動をやって、子供も先生方も熱い思いを持ちながらやっているというイメージが非常にありました。その中で愛校心みたいなところが、学校ごとに戦っていたので、学校を愛する心みたいなところが、一体感として生まれてきて、応援に行く側も一体感があって、そういうところに部活動のモチベーションがあったように感じていました。自分が子供の頃の部活動から、だんだん少しずつ離れていって、先生方がやはり大変だなというところが見え始めてきている時期でした。今は、働き方改革という、労働基準の話が出てくるので、土日両方出てしまうと、これで時間外が飛んでしまいますので、厳しい状況になるのだろうなと思います。
　部活動に中学生は全員入るという、この取り決めというのは、今後もずっと続けていくという中での話し合いになっていくのでしょうか。

事務局
　これから部活動の地域移行を考えていくには、今おっしゃった部分は、考えなければいけないことだと思います。学校教育の中から、土日の部活動を地域に移行するということで、そこに起こってくる送迎であったり、いろいろな活動の費用的なものであったりを含めて、全員加入で全ての子にその負担を負わせることが、なかなか、難しくなってきます。そうすると、やはり任意加入ということを検討しながら、地域移行を考えるということになってくると思います。

教育委員
　そこのところが今お話があった、両極端の人たちがいるよという中では、そこが最終的には課題になってくるのではないかなと感じています。人口が減少していって、こういうスポーツがここでできないから、じゃあ他のクラブに入るといったように、要はやりたい人たちがやはりそこに行くのであって、やりたくないのに、そこまで送迎をしてもらって、費用を払って行かなくてはいけないのかという疑問がきっと大きく挙がってくると思うので、そこを丁寧に方向性を決めていかないと、地域に移していくという中では、難しい問題があると思います。費用の負担や移動時間、冬は移動したら何もできない状況ですので、それを考えていくと、必ず全員が何かしらに参加というところが、今後難しくなるのではないかと思います。根本的な話で恐縮ですが、

そこも視野に入れていかないと、このことを進めていく上では、ちょっと難しいかなという感じがすごくします。

事務局
　先ほど生徒会のお話の中で進路の話が出ましたが、部活動に取り組んでいる姿勢というのは、その時に評価の１つになります。これが地域移行をしていくと、学校の部活動の中で一生懸命やっている生徒に対しては、学校の先生も評価ができる訳ですけれども、地域に出ていくと、なかなかそれが捉えられないということで、このあたりについては大きな課題の１つとしています。全員加入ということがなかなか難しくなってくるだろうと思います。その時に、地域移行をしていった時に、地域でのいろいろな活動をどのように評価してあげるのかといったことを含めて、この全員加入のことや、進路の問題、評価の問題は非常に大きな課題で、我々はこれをどのように落とし込んでいくのかということが課題であると考えています。

教育委員
　今お話がありましたが、非常に大きな課題で、愛校心とか、すごく良かったなと感じる部分もあります。なので、部活動で、そのもしそういうことになってしまうのであれば、それをどのように授業の中で補っていくのかというところも、教育の中では大きな課題になってきます。そこを含めると、この方向で行きましょうということが決めづらくて、この資料に出ているものや、資料５の緑色の部分を、少しずつやっているところも増えてきていますが、このような形を進めながら考えていくという落とし込みになるのかなという感じがしています。

市長
　地域移行の方に話が入ってきていますが、委員がおっしゃった、全員が部活動に参加する、やらなくてはいけないのかということは、基本的な部分ですよね。地域移行の話に入ってしまうのですが、これは休日の地域移行ということで、先ほど話がありましたが、学校でやるものだけ部活動に出るが、土日の地域移行には参加しないという選択肢もありますよね。しかも、種目が違うものを選ぶことや、平日はスポーツで、休日は文化系に入るということもありますよね。もちろん行かないということもありますよね。

教育委員
　すごい多様性ですね。

市長
　いろいろな選択肢が当然あるし、学校の部活はやらなくて、地域クラブの方へと行くといった、学校の単位ではなくて、地域クラブに行く場合もありますよね。そうすると、学校のチームで出るのか、クラブチームで出るのかといったことも出てくるということですね。

ウェブサイト公開用

事務局
　中体連に関しての動きについてお話しします。

事務局
　先日県の会議で、やはりこの地域移行に向けて、地域クラブ活動がいろいろな大会に参加する上で、来年度やはり学校の部活で参加するのか、それとも地域クラブで参加するのかというところを、やはり聞くことになる予定で今おります。ですので、来年度以降、４月や５月頃に、生徒に、あなたはどちらのチームでというのでしょうか、聞くことになります。来年度に関しては、ほぼ部活動でということになるとは思いますが、やはり地域のクラブが増え始めると、そちらの方で参加するという子もやはりいるのではないかと思います。現在は、各競技によって、地域クラブで活動している子たちの参加の資格なども、各競技で決められているというような状況になっています。

市長
　そうしますと、委員がおっしゃった愛校心と言いますか、学校を代表してという、そういう部活の良さというのが無くなってしまうが、それでよしとしている訳ですね。そうするともう、部活動という考え方は無くなってしまうじゃないですか。これまでの考え方とは違ってきてしまう気がします。
　一応１と２のところはこれで話を終えて、メインの課題になる部活動の地域移行の話にも入っていますが、そちらでよろしいでしょうか。
　皆さんの方から何かありますか。疑問点等、いろいろあるかと思います。確認したい点も多々あろうかと思います。どんなことでも結構ですので、お願いします。

教育長
　皆さんの御意見を伺わせていただいて、これから担当の方々を交えた分科会であるとか、推進会を開いていきたいと思っています。これまで、部活動には全員参加ということを前提にしていました。しかし今後はそういうことではないだろうという、今の市長の話もありますが、そういう方向性ということが考えられていくのですが、その点について、皆さんからどのように御意見を頂けるかなと思います。やはりこれまでは、進学ということがありまして、必ずしも部活動は全員加入でなければならない訳ではありませんが、高校進学資料の中で、先ほど次長の話の中にありましたように、部活動での活躍ぶり、たとえ大会にレギュラーで出なくとも、一生懸命に取り組んでいる姿というものは、高校進学の時に諸活動の記録として、高校に本人の活躍ぶりを示してきました。部活動に所属していないと、そういう面でのアピールというか、活躍ぶりをアピールすることができませんので、何とか全ての子供たちにアピールする場を設けるために、部活動が１つの手立てとしてありました。しかし、部活動は必須ではありませんので、ここにも書いてあります通り、教育課程外の活動で必須ではないです。それなのになぜ全員加入かと言いますと、そうした現状の中であります。しかし、ここで立ち戻ると、必ずしもこれから先、もし地域移行化した時に、活動費というものが発生し、これまでは教員が無料でやっていましたが、これからはいろいろ

な地域の方々にお願いすると、報酬を出さなければなりません。そうしますと、活動費を保護者に負担していただくことも考えられます。その中で、全員加入ということは難しいのかなと思います。家庭によっては、うちは部活動ではない別の形で子供たちにいろいろな体験をさせたいので、土日は部活動をさせませんという御家庭も出てくるでしょうし、併せて平日も、敢えて別の活動をさせたいという家庭、個人もあるかもしれません。そういう多様性の中で、全員加入については、今後難しくなってくるのかなと、そこにこだわらないほうが良いのかなというのが１つの考えとしてあります。このことについて御意見を頂ければと思います。

市長

３の部活動の地域移行については、先ほど論点について出されています。子供たちにとってより良い地域移行の姿といった、まずそこのところの議論を深めていかなければと思います。教育長からもお話しいただきましたけれども、どのような意見をお持ちでしょうか。

教育委員

今のお話し、聞いてみて本当にそうだなと思います。一方で保護者の立場からすると、学校で部活動があって、これまではどこかに所属していて、知れている仲間と、知れている先生の中で、また勉強とは違う形で研鑽している安心感と言いますか、その部活に対する期待というものがありました。それが無くなると、それこそどこかをほっつき歩いたり、ずっとスマホばっかりやっていたりしたらどうしようという、別の心配が家庭の中ではあります。そういう中で、今まではとりあえずは加入しなければならないという中で、選択肢はそれなりに豊富でしたので、何かしら興味を持つところがあって、そこに所属して、その中で頻度の多寡はあれども、まあ厳しいところもあったり、緩いところもあったりするけれども、自分で選択をして所属ができたということです。保護者としての安心感もありましたし、子供もそれがきっかけで何かに興味を持つとか、生涯楽しめるものを見つけるとかということがあったと思います。それが地域移行になって、全員加入をしなくてよいとなった時に、だったらいいやということで、結局は取り残されてしまう子供たちなり、保護者としても、お金がかかるのならうちはいいやと、やらないということで、そういう良いものに触れる機会も無いままに、親の理由で地域移行の部活動に所属できないという子供たちを、どうやって公教育という中でサポートしていってあげられるのかというところを考えていってあげなければいけないのかなと思います。私も何かこうすべきといったようにまとまっている訳ではありませんが、そういう意味でも難しさがあるのかなと思います。

市長

土日の活動の中で、費用的なところが発生すると、それによって参加できないという、そういうことがあるなら、支援というものが当然必要になるのではないかなと思います。みんな平等にそういう機会が与えられるようにならないといけないと思います。

まずは休日の地域移行といったときの、参加するかしないかといったことは、これ

は当然選択になってくると思いますし、内容も当然そうでしょう。

教育委員
　具体的なことではありませんが、中学生の多感な時期に、いろいろなことを吸収したり、吸収できないこともあったりといった時に、私の感覚ですが、何かしらの部活動に所属することで、大会であったり、作品を作ったりで、自分のよし悪しがあったり、達成感があったりという、これからの将来に向けてのきっかけを掴むところの機会が、この部活動というものにあったのではないかと思います。平成 30 年から時間が短くなったとしても、子供たちにとって何かしらの得られるものがあったと思います。そういう機会をしっかりと子供たちに感じてもらえて、何かの次になる自分の気付きというところをしっかりと、地域移行でも得られるということを守っていってあげたいと、私自身は考えます。そこがちゃんと体感できないと、この後の高校、大学、社会人になったとしても、なかなかどうなのかなとなるのではないかと感じます。

市長
　平日の活動とは当然変わる訳ですよね。場合によっては指導者も変わります。地域の指導員が指導されますから。メンバーも変わりますよね。委員がおっしゃるような、部活動で得られてきたものというのは、平日のものとは違ってきますよね。休日は技術力のアップが中心になるのかも知れません。そういう考え方になるのでしょうか。

事務局
　本当にその通りです。実際に地域部活になった時に、それぞれの学校の子供たちがシャッフルされてクラブチームなり何なりに入ってくるので、まず愛校心が無くなることは間違いないです。技術の面で、もしかしたらチームプレイをやることで、そこに一体感が生まれることがあるかもしれませんが、それ以外のところはないだろうということがあります。それから、平日の部活動をどのように持って行くか、実際にそれを存続させるかどうかで、子供たちのモチベーションも変わってくると思いますし、格差が生まれることは間違いないです。地域部活に参加できる子供たちができることと、それに参加しない子供たちとの間に差が生まれてくることは間違いないかなと思います。それをどうするかということは、これから意見を伺いながら考えていくしかないのかなと思います。平日、冬は 15 分間しかできませんが、夏は１時間、１時間半できます。その部活をどのような形で残していくのかを含めて、これから考えなければならないと思っています。

教育長
　土日の部活動は、話の中にもありましたが、平日の部活動と違う種目を選んだり、学校にはない種目をせめて土日だけでもやりたいことをやりたいといったりで、例えばバドミントンをやりたいという子が、自分の学校にはバドミントン部が無いけれども土日はバドミントンをやって、そして自分が将来続けていきたいことを土日の部活動でやりたいという子が、これから増えてくるのかなと思います。そういう門戸を開放してあげるというか、広げてあげたいというのは、今回のテーマでもあると思いま

す。また、富士市の部活動でも、皆さんの御意見の中で、そうした方向性というものを示されて、その方向に行くということが前提であるとすると、それで進めていくということになります。ただその中で、教育的意義ということがこれまでの部活動にはありました。土日に地域に移行して、協会の方々に委ねたときに、教育的意義やこれまでの役割というもの、ここに示してあります自己肯定感や自尊感情や、やり抜くということ、目標を持って１つ１つ計画を立ててやり抜いていって、最後に１つの成果を得られた時の自分の喜びにするということの価値を、土日の部活動ではそれを捨ててしまうのか、それはもう期待をしないで技術だけ、そのスポーツだけを楽しんでもらえるようなことをお願いして、地域移行の指導者の方に委ねるのかということがあります。若しくは、生涯的人間教育という意味を込めて、土日にもそうした協会の方々にも、そうした教育的配慮や主体性、自分で考えて自分で計画をして自分でといった力を付けていただけるような、そのような指導のお願いをこれからしていくことが必要になるのかなというのが一方であります。そうした、土日についての教育的意義、愛校心が無くなってしまうという話がありましたが、じゃあ別の何か、組織愛や集団愛だとかというものを、どのように培ってあげるのかが大事だと思います。そうしたものをこれから求めていくことが必要ではないかなと、私は思いますが、皆さんはそうしたものをどのようにお考えになりますか。御意見いただければありがたいです。

市長
　教育長から問題提起がありましたが、どうでしょうか。
　私は、地域の受け皿がそこまで任されて、できるかというと、どうかなという気がします。志を高く持って、それもやりましょうと言ってくだされば良いですが。

教育長
　指導者研修という機会があります。研修の一環の中に、そうしたことを入れていただくようにしていくこともあるのかなということも考えています。協会の方の御意見等、何か部活動指導に当たってありますか。

事務局
　スポーツ協会も、各競技団体にアンケートを取ってくださっています。そのアンケート結果を見ますと、協力できるところは協力するといった回答が多いかと思います。先ほど教育長からお話があったとおり、受け皿のどの部分まで考えていらっしゃるのかというところについては、私どもも、まだまだ把握しきれていないところです。ある程度のところは協力するということですが、協力するという意味が全て協力するという意味か、この部分については協力するという意味かの確認はできておりません。

事務局
　補足します。いくつかの団体の方にお話を聞きましたら、かなり地域移行に期待感を持っている団体があります。子供たちをどんどん受けるよと、非常に高いモチベーションでいるところもあります。ただ、教育的意義という意味よりも、競技人口の底辺拡大という意味で、どんどん若い子供たちに自分たちの競技の楽しさを知ってもら

いたいという思いがあります。その辺りを上手く捉えていって、そこに教育的意義もというところもあります。団体によっては、非常に期待感を持って、この地域移行を捉えている方々がいるという話を聞きます。

教育委員
　家庭や地域の結びつきが、今弱くなっていますよね。そういった中で、部活における人間形成というのは、非常に価値があると思います。その価値を認めなければならない。それを無くすということはできないと思います。それに代わるもの、方法を、いろいろ問題点が挙がっていますので、その辺りをどうやって解決するのかという方向に行くのであって、部活自体は残す、部活の趣旨は絶対に残さなければいけないと思います。やり方の問題として、何か考えていかなければいけないのかなと思います。むしろ昔よりも部活の価値が、ある意味増しているのではないかと思います。もちろん、部活でサッカーをやりたくても 11 人集まらないから試合ができないといったことや、野球をやりたくても 9 人集まらないからチームにならないといったことは、確かに問題があるので、それは何か別な方法で補っていくのであって、部活を無くす方向等、そういう方向だけには行ってもらいたくないです。

市長
　野球やサッカー等、ある程度人数が必要なのでチームが作れないということで、別の学校や地域でチームを作るということは、まあいいんじゃないかなと思います。学校の中での部活動もちゃんとやっていますし、地域移行の良さも享受できるということです。いろいろなパターンがありますので、あまり何でもいいにしてしまうと、部活自身が無くなってしまう、本来残さなければならないのに、部活の意義というものが全く無くなってしまうということは、避けなければならないです。委員がおっしゃったのは、そういうことかなと思います。

教育委員
　まさにその通りだと思います。先ほど、この資料の緑色の部分がという話をさせていただきました。私は、部活が無くなってしまうのは、非常にさみしいと思っています。何とか残せる方法で、働き方改革も人口減少もこなせるような方法でということで、当面の間はこの形なのかなという感じがしています。学校にある部活の手伝いをしてくれる地域の方がいて、子供たちはやはり学校の看板を背負って戦う、あるいはその地域の看板を背負って戦うというようなことをしながら、愛校心や地域を愛する心を育んでいくというような形を取って、どうしても足りないところは、学校同士で連携をしながら、地域として 1 つの団体としてまとまって戦っていくという形をとるような方向性が、持って行きやすいのかなという感じがします。その時に、指導員の方を、どのように選んでくるのかということが、これから大変なところだと思います。以前、自分たちの子供がいたときに、どこかのクラブの指導者の方が入ってくれていたクラブがあったのですが、ものすごく荒れてしまいました。勝つということに重きを置いてしまったので、教育的観点ではなくて。それまでは、できない子も一緒に試合に出してあげるということをしていたのですが、勝つということに重きを置いてし

まうと、できない子を排除してしまうのですね。こっちで練習していなさいと。そして、強化訓練だけ、こっちでしている。それで試合に勝って、良い成績を収めてということに行ってしまうと、それはどうなのかなというところもあります。クラブチームと学校の部活の違いというのは、やはり教育的な意味を持たせていっていただきたいなという感じを、今でも持っています。

市長
　資料５の緑のところですが、これは過渡期的なものなのか、それとも、これはこれで完成形と考えて良いのか。その辺りの説明をお願いします。

事務局
　この緑色の左上にも書いてありますが、直ちに１と２のような体制を整備することが困難な場合はというような前置きで、先ほど教育委員からも話があったように、当面はこういう形になるであろうと思います。そして、ゆくゆくは１と２のような形に、平日も含めてにはなりますが、平日も含めてゆくゆくは、こういう地域の方の活動に移行していくというような捉えがあります。

事務局
　資料の４にもありますが、４の３、学校部活動の地域連携や、地域クラブへの移行に向けた環境整備とありますが、主な内容のところに、まずは休日というふうに書かれていて、その下も、平日の環境整備ができるところからと書かれています。今日の議題の教員の働き方改革にもつながるところですけれども、最終的には平日も学校部活動を学校から切り離すというところを狙っているので、そこも見据えた上で考えていかなければならないのかなというふうに、事務局としては思っています。

市長
　そうすると、もう部活動と言っていいかどうか分かりませんね。これは、考え方が変わってしまうのですか。その辺りは、どうなんですか。地域の力を借りて、足りない部分を補っていくということではないのですか。それだと全然違う議論になってしまうのではないですか。教師の負担軽減というのは分かりますが、完全に離してしまうのでしょうか。

事務局
　そこのところが、日本全国、今ここで話されたような、部活を本当に無くしていいのかという思いを持っている方が大勢いらっしゃいます。だから、なかなか話が進まずに、今までのように部活動が行われてきました。しかし、何らかのメスを入れなければ教員の負担を減らすことはできないという中で、国がこのタイミングでこの話を出してきたので、本当に今それぞれのところで、皆さん困っているというのが正直なところだと思います。本当にこれを進めていいのかという意見も、あちらこちらで出ているとのことらしいのですが、ただ、国が今、そういう方向性を出している以上、私たちも動かなければいけないのかなと思っています。

教育委員
　ということは、例えばこのグリーンのパターンで、上手く回って、教員の先生方の時間短縮ができてきたという効果が出ても、この上に移行しなければいけないのですか。

事務局
　まずガイドラインについて、冒頭担当から説明いたしましたが、まだ案の段階で、これからパブリックコメントにかけていくらしいのですが、つい先日の報道でもありましたが、国の方も若干、迷走とまではいかないですが、かなりこれに関して相当な御意見がある中で、少しトーンが弱まってきている状況がございます。ですので、こうでなければならないというところは、今の段階では全然決まっていません。先ほどから皆さんの御意見を伺っている中で、やはり富士市から学校における部活動は、絶対に無くしてはいけないよねという御意見が、非常に強く感じました。これから我々が、まず休日における地域移行を検討し始める中で、年明けから具体的に検討をしていくのですが、この総合教育会議で皆様から、かなりその辺の御意見を頂いたことは、我々も強く認識して検討してかなければならないと思っています。委員からありました、この緑のスタイル、これをよりブラッシュアップして、そこに教員の働き方改革、どういう手法がここから導き出せるか分かりませんけれども、そういうスタイル、学校の部活動というものは、教育的意義を改めてしっかり認識していくこと、関係者と共有していく中で、そこは揺るがすことができないということであるならば、我々の目指すところが少し見えてくるのかなと思います。現段階では、全然こうあるべきや、こうでなければならないというところではないです。

教育委員
　これから捉えをしていって、ということもあるということですか。

事務局
　資料６の四角の中に、５つのひし形があって、冒頭担当の方からも、かなり高い目標だとありましたが、ここができれば、本当に理想に近いようなスタイルですが、これと、先ほどから皆様から出ているような、子供たちにおける部活動の教育的意義というものを絡めたときに、なかなか両方が共存できない部分もあるかもしれませんので、その辺のところ、どこを我々は目指していくのかというのは、悩ましいところだと思っています。

市長
　私自身よく分かっていない中で、このように確認をしながら、いろいろと意見を出させてもらっていますが、考え方とすれば、この緑のところの中でやっていくということなのかなと思います。その先につきましては、国や県もそうなのでしょうけれども、やはりもっと議論が必要になってくるかなという気はします。
　まとまるようなものではないと思うのですけれども、今の皆さんの意見の中ですと、部活のそもそもの意義ということを、やはりこれは持ち続けていってほしい、愛校心

ということもありましたし、そういうことが育まれてきたものじゃないかと、卒業してからも大人になってからも、そういうことが人間形成にも大きな意義のあるもの、役割になっていたのではないかと思います。そこのところは、何とか維持していきたいということではないかなと思います。その中でも現状は厳しい部分もありますから、子供たちにとっても自分の思うような部活ができない、試合に出られない、そこを何とか解決するためには、今言っていた緑のところからスタートしていって、地域のいろいろな人材を指導員として活用していくということでしょうかね。

この後の、働き方改革というところについては、当然やっていく中でついてくるものだと思っています。あと、令和５年から何かをやり始めるのでしたか。どうなっていますか。令和５年、６年、７年の３年間の間に。

事務局

部活動の地域移行に関しまして、懇話会を私たちとしては持って行きたいと思っています。学校の中体連の関係、文化連盟、体育連盟といったところ、それから市の関係する課で集まって、年に何回か、今年度はできれば１回か２回は必ずやりたいなと思っています。そういったところで話し合いを続けて、部活の意義を残しながら、どうやって地域移行ができるかということで、協議をしていきたいと考えています。

事務局

補足です。今協議の話がございましたが、実際にモデル的に試行をし始めるということもあるかと思います。こちらにちょうど、先ほどから話題になっている緑だとかがありましたけれども、実際に冒頭に私も言いましたが、かなり期待感を持っている団体等が、もしかしたら受けてくれる、それは自分たちのフィールドでですけれども、それをいくつかの学校であったり、競技であったりで、いろいろなモデル的な実施をしてみて、そこで課題を見つけたり、いいとこどりをしてみたり、そのようなことを、協議もしつつ、できるところから、可能なところからモデル的な試行などを、実際に県内の先進のところではやっていますので、その辺りもやりながらというところです。本当にこれということは無いのかもしれません。冒頭の説明の中でも、この中で①、②、緑ということで、１つの自治体で複数取り組んでいるところもあります。エリアごとであったり、モデル的にやったりしていますので、そのようなこともやりながら、来年からの３か年の中で方向性を見出していきたいなと考えています。

市長

分かりました。

このことは資料の最後にも、それぞれ国や県が定めて、これでやりましょうという一律のものではないということですね。自治体ごと、場合によっては自治体の中でも、地域ごとによっても、さらにバリエーションがあるのではないかと思います。だからこそ皆さんも御苦労されるのだろうなと思うので、今後時間を掛けながらやっていくということなのでしょうかね。令和５年度以降からは、国の方からも何か具体的にやり始めなさいと言っているのですか。だから今言った、モデル的なものからやっていくということなのでしょうね。

ウェブサイト公開用

事務局
　まずは、庁内各課や関係団体との協議をしながら、今年度、年明けから２回程協議の場を持ちたいなと考えています。

教育長
　今、次長の方からモデル的な取組ということで出ました。ただ、あまり急ぎたくはない、慌てたくはないというのがあります。これは、教員の働き方改革の問題と絡むので、ある地域は進んで、ある地域は進んでいないとすると、ある地域だけ教員の働き方改革が進んでしまう可能性があって、ある地域の部活動の教員は、土日ほとんど無いが、ここの競技は働き方改革が進んでいないので、土日も出なければならないということがあります。その辺りの、教員の働き方改革における、地域間格差や不公平感が出ると、教員のモチベーションにも影響するので、あまり慌てて、この方向でここはこうやって行きましょう、ここはまた違うやり方でやりましょうと見切り発車してしまうと、後でいろいろな弊害が出てくるのかなと思います。やはり、協議をしっかりとして、みんなが納得していくような形で、一歩一歩進めていくことも大事なのかなと思います。国の方も、先ほど事務局からも話がありましたが、トーンダウンしているのは、やはりそういうことなんですよね。あるところがやって、あるところができないとなると、地域間格差が生まれ、それは子供にとっても決して良いことではないし、それから教員にとっても、あそこの地域に行くと教員の働き方改革が進んでいて、土日部活に出なくて休んでいられるが、うちのところは全然進んでいないので土日もやらなくてはならない。じゃああっちに行こうよと、あっちの学校に行きたいとか、あっちの市に異動したいとかという思いにさせるのも、これも酷なのかなと思います。やはり、他市と動向も踏まえながら進んでいくことも大事なのかなと思っていますので、皆さんの御意見をいろいろ聞きながら、協議会の中でできることや、基本的な緑の形というものを、いかにして保ちながら具体的にできるかというところを基調にしながら進めていくことが大事なのかなと、私は考えています。

市長
　分かりました。
　今日この会議におきまして、現状の部活動の課題、それから地域移行については、まだまだ分かりにくい点がありましたので、今日の議論の中で、およそその姿と言いますか、国が目指している部分というのは出てきたのかなと思っています。今後協議を深めていく中で、富士市としてどういう方向で行くのが良いのかということについて、もう少し時間を掛けていくことになろうかと思いますので、また、こういった機会をぜひ持てればなと思っていますので、よろしくお願いしたいと思います。
　よろしいでしょうか。今日はありがとうございました。

閉会
事務局
　長時間に渡り、ありがとうございました。先ほど申し上げましたが、年明けから協

議を始めたいと思っています。協議を進めていくに当たり、大きな方向性を、この総合教育会議でということで、本日のテーマを設定させていただきました。短い時間の中ではありましたが、大きな方向性を頂くことができました。ありがとうございました。関係各位と一緒に進めていく中で、部活動の教育的意義を、いろいろな方々と改めて共有しながら協議を進めてまいりたいと思います。

本当に今日は、実のある会議となりました。ありがとうございました。

以上を持ちまして、本年度第２回の総合教育会議を終了いたします。どうもありがとうございました。